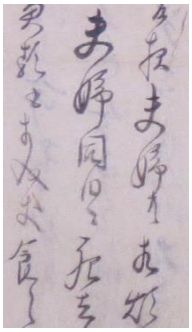
古今当在



幕末のコレラ流行とある夫婦の死について

日野商人・中井源左衛門家では、仙台藩から領内で集めた米を江戸へ輸送して一手に販売することを任され、安政六年（一八五九）に深川（東京都江東区）の仙台藩蔵屋敷の会所に数名の奉公人を配置しました。その一人が水野宇兵衛です。翌年に中井家はこうした立場を失いますが、それ以降も水野は中井家が深川に設けた店で活動し続けたようです。

水野は江戸から日野の中井本家に宛てて数多くの書状を送っており、そこには文久二年（一八六二）以降の麻疹やコレラ流行に言及したものも含まれます。企画展ではこうした書状を二通展示しましたが、さらにもう一通紹介します（画像は書状の一部）。この書状には、日付が「八月四日」とだけ記され、本文中には「上様御帰城後、世間穏やかにて」との一文があります。「上様御帰城」とは、文久三年三月に上洛した一四代将軍徳川家茂が同年六月に江戸へ戻ったことを指すので、水野が書状を作成したのも同年八月四日と見てよいでしょう。

この書状によれば、深川の店に勤めていた夫婦がコレラで亡くなったようです。以下、現代語訳を示します。

…私（水野）の店内で、七月二五日の夜に夫婦である男女がそろって流行病（コレラ）に罹りました。一人は翌朝に、もう一人はその夜の五ツ頃（二〇時頃）に亡くなりました。夫婦が同じ日に死去したのです。夫は私と同じ年齢で、いつも健康に気を使い、夏場は魚類をなるべく食さず、日々灸治などもしていました。もっとも、行いがよい者であっても、寿命の長さは別物であるようです。私は健康を意に介さずに来ましたが、今日まで無事生き永らえました。しかしながら同じ年齢の者が亡くなったのは、隣の家まで火災が及んだ気分で、とても力を落としてしまいました…

人の命のはかなさを感じたのか、水野は「何時にても閻王の使い参り候とも、差し支えこれ無き様仕りたき覚悟」―いつ閻魔王の使者が来ても問題ないようにしたい覚悟です―と書状に記しています。もっともこれに続けて、「下拙仕出し置き候貸金の一条は、命これ有る内は急度相片付け申すべく候」―私がしでかした「貸金一条（商売上の貸付金をめぐる揉め事）」は、命ある間にはきっと解決します―とも述べており、商人の意地は衰えていなかったようです。

（専任教員　青柳周一）

二〇二一年四月から二〇二一年九月までの史料館の動き

◇展示

令和三年度春季展示（オンラインで公開）
「読　調　整　覧　～史料館のしごと～」
五月二七日（木）～七月二二日（木）

◇整理

・仲屋町元共有文書【近江八幡市】
・奥野文雄家文書（後発見分）【彦根市】

発行　滋賀大学経済学部附属史料館
TEL 0749-27-1046　https://www.econ.shiga-u.ac.jp/shiryo